

狂言の神

太宰治

青空文庫

なんじら断食するとき、かの偽善者のごとく悲しき面容おももちをすな。

(マタイ十六章十六。)

今は亡なき、畏友いゆう、笠井一かさいはじめについて書きしるす。

笠井一。戸籍名、手沼謙蔵。明治四十二年六月十九日、青森県北津軽郡金木町に生れた。亡父は貴族院議員、手沼源右衛門。母は高たか謙蔵は、その六男たり。同町小学校を経て、大正十二年青森県立青森中学校に入学。昭和二年同校四学年修了。同年、弘前高等学校文科に入学。昭和五年同校卒業。同年、東京帝大仏文科に入学。若き兵士たり。恥かしくて死にそうだ。眼を閉じるとさまざまの、毛の生えた怪獣が見える。なあんてね。笑いながら厳肅げんそうのことを語る。と。

「笠井一かさいはじめ」にはじまり、「厳肅げんそうのことを語る。と。」にいたるこの数行の文章は、日本紙に一字一字、ていねいに毛筆でもって書きしたためられ、かれの書斎の硯すずりばこ箱ばこのした

に隠されていたものである。案ずるに、かれはこの数行の文章をかれ自身の履歴書の下書として書きはじめ、一、二行を書いているうちに、はや、かれの生涯の悪癖、含羞の火煙が、浅間山のそのように突如、天をも焦がさむ勢にて噴出し、ために、「なあんでね」の韜晦とうかいの一語がひよいと顔を出さなければならぬ事態に立ちいたり、かれ日頃ご自慢の竜頭蛇尾の形に歪めて置いて筆を投げた、というようなふうである。私は、かれの歿したる直後に、この数行の文章に接し、はつと凝視し、再読、三読、さらに持ち直して見つめたのだが、どうにも眼が曇つて、ついには、戯歎の波うねり、一字をも読む能わず、四つに折り畳んで、ふところへ、仕舞い込んだものであるが、内心、塩でもまれて焼き焦がされる思いであつた。

残念、むねんの情であつた。若き兵士たり、それから数行の文章の奥底に潜んで在る不安、乃至は、極度なる羞恥感、自意識の過重、或る一階級への義心の片鱗へんりん、これらは、すべて、錢湯のペンキ絵くらいに、徹頭徹尾、月並のものである。私は、これより数段、巧みに言い表わされたる、これら諸感情に就いての絶叫もしくは、唖れた^{しわが}眩きを、つがや、阪東妻三郎の映画のタイトルの中に、いくつでも、いくつでも、発見できるつもりで居る。殊にも、おのが貴族の血統を、何くわぬ顔して一こと書き加えていたという事実じつじに就いては、

全くもつて、女子小人の虚飾。さもしい真似をして呉れたものである。けれども、その夜
 あんなに私をくやしがらせて、ついに声たてて泣かせてしまったものは、これら乱雑安易
 の文字ではなかった。私はこの落書めいた一ひらの文反故ふみほごにより、かれの、死ぬるきわま
 で一定職に就こう、就こうと五体に汗してあせっていたという動かせぬ、儼げんたる証拠に触
 れてしまったからである。二、三の評論家に嘘の神様、道化の達人と、あるいはまともの
 尊敬を以て、あるいは軽い戯れの心を以て呼ばれていた、作家、笠井一の絶筆は、なんと、
 履歴書の下書であった。私の眼に狂いはない。かれの生涯の念願は、「人らしい人になり
 たい」という一事であった。馬鹿な男ではないか。一点にこらぬ清らかなの生活を営み、友
 にも厚き好学の青年、創作に於いては秀抜の技量を有し、その日その日の暮しに困らぬほ
 どの財産さえあったのに、サラリイマンを尊び、あこがれ、ついには恐れて、おのが知れ
 る限りのサラリイマンに、阿諛あゆ、追従ついで、見るにしのびざるものがあったのである。朝
 夕の電車には、サラリイマンがぎつしりと乗り込んでるので、すまないやら、恥かしい
 やら、こわいやらにて眼のさきがまっくろになつて居づらくなり、つぎの駅で、
 すぐさま下車する、ゲエテにさも似た見ごとの顔を紙のように白ちやけさせて、おどおど
 私に語つて呉れたが、それから間もなく死んでしまった。風ふうがわりの作家、笠井一の縊死いし

は、やよいなかば、三面記事の片隅に咲いていた。色様様の推察が捲き起つたのだけれども、そのことごとくが、はずれていた。誰も知らない。みやこ新聞社の就職試験に落第したから、死んだのである。

落第と、はつきり、きまつた。かれら夫婦ひと月ぶんの生活費、その前夜に田舎の長兄が送つてよこした九十円の小切手を、けさ早く持ち出し、白昼、ほろ酔いに酔つて銀座を歩いていた。老い疲れたる帝国大学生、袖口ぼろぼろ、蚊の脛ほどに細長きズボン、鼠いろのスプリングを羽織つて、不思議や、若き日のボオドレエルの肖像と瓜二つ。破帽をあみだにかぶり直して歌舞伎座、一幕見席の入口に吸いこまれた。

舞台では菊五郎の権八が、したたるほどのみどり色の紋付を着て、赤い脚絆、はたと手を打ち鳴らし、「雉も泣かずば撃たれまいに」と呟いた。嗚咽が出て出て、つづけて見ている勇気がなかった。開演中お静かにお願い申します。千も二千も色様様の人があるのに、歌舞伎座は、森閑としていた。そつと階段をおり、外へ出た。巷には灯がついていた。浅草に行きたく思った。浅草に、ひさごやというししの肉を食べさせる安食堂があった。きょうより四年まえに、ぼくが出世をしたならば、きつと、お嫁にもらつてあげ、とその店の女中のうちで一ばんの新米、使いはしりをつとめていた眼のすずしい十

五六歳の女の子に、そう言つて元氣をつけてやった。その食堂には、大工や土方人足などがお客であつて、角帽かぶつた大学生はまつたく珍らしかつた様子で、この店だけは、いつ来ても大丈夫、六人の女中みんなが、あれこれとかまつて呉れた。人からあなどりを受け、ペしやんこに踏みにじられ、ほうり出されたときには、書物売り、きまつて三円なにがしのお金をつくり、浅草の人ごみのなかへまじり込む。その店のちようし一本十三銭のお酒にかなり酔い、六人の女中さんときれいに遊んだ。その六人の女中のうち、ひとり目立つて貧しげな女の子に、声高く夫婦約束をしてやつて、なおそのうえ、女の微笑するやうないつわりごとを三つも四つも、あらわでなく誓つてやつたものだから、女の子、しだいに大学生を力とたのんだ。それから奇蹟があらわれた。女の子、愛されているという確信を得たその夜から、めきめき器量をあげてしまった。三年まえの春から夏まで、百日も経たぬうちに、女の、髪のかたちからして立派になり、思いなしか鼻さえ少ししたかくなつた。額も顎も両の手も、ほんのり色白くなつたやうで、お化粧が巧くなつたのかも知れないが、大学生を狂わせてはすかしからぬ堂々の貫禄をそなえて来たのだ。お金の有る夜は、いくらでも、いくらでも、その女のひとにだまされて、お金を無くする。そうして、女のひとにだまされるということは、よろこばしいものだどつくづく思った。女は、大学

生から貰ったお金は一銭もわが身につけず、ほうばいの五人の女中にわけてやり、ばたばたと脛の蚊を団扇うちわで追いはらって浅草まつりが近づいたころには、その食堂のかんばん娘になつていた。神のせいではない。人の力がヴィナスを創った。女の子は、せわしくなるにつれて恩人の大学生からしだいに離れ、はなれた、とたんに大学生の姿も見えなくなった。大学生には困難の年月がはじまりかけていたのである。

その夜、歌舞伎座から、遁とんそう走して、まる一年ぶりのひさごやでお酒を呑みビールを呑みお酒を呑み、またビールを呑み、二十個ほどの五十銭銀貨を湯水の如くに消費した。三年まえに、ここではつきりと約束しました。ぼくは、出世をいたしました。よい子だから、けさの新聞を持つておいで。ほら、ね。ぼくの写真が出ています。これはね、ぼくの小説本の広告ですよ。写真、ベそかいてる？ そうかなあ。微笑したところなんだがなあ。約束、わすれた？ あ、ちよいと、ちよいと。これは、新聞さがして持つて来て呉れたお礼ですよ。まったく気がるに、またも二、三円を乱費して、ふと姉を思い、荒っぽい鳴咽なげなげが、ぐしゃつと鼻にからんで来て、三十前後の新しんない内流しをつかまえ、かれにお酒をすすめたが、かれ、客の若さに油断して、ウイスキーがいいとぜいたく言った。おや、これは、しつけない、しつけない。若いお客は、気まえよく、あざむかれてやってウイスキーを一杯のま

せ、さらにそのうえ、何か食べたいものはないかと聞くのである。新内いよいよ気をゆるし、頼杖ついて、茶わんむしがいいなと応え、黒眼鏡の奥の眼が、ちろちろ薄笑いして、いまは頗る得意げであった。さて、新内さん。あなたというお人は、根からの芸人ではあるまい。なにかしら自信ありげの態度じゃないか。いずれは、ゆいしよ正しき煙管屋きせるやの若旦那。三代つづいた鰹節かつおぶし問屋の末っ子。ちがいますか？ くだんの新内、薄化粧の小さな顔をにゅつと近よせ、あたりはばかりひそひそ声で、米屋、米屋、と囁ささやいた。そこへ久保田万太郎があらわれた。その店の、十の電燈のうち七つ消されて、心細くなったころ、鼻赤き五十を越したくらしいの商人が、まじめくさつてはいつて来て、女中みんなが、おや、兄さん、と一緒に叫んで腰を浮かせた。立ちあがつて、ちよつとかれに近づき、失礼いたします。久保田先生ではございませんか。私は、ことし帝大の文科を卒業いたします者で、少しは原稿も売れてまいりましたが、未だほとんど無名でございます。これから、よろしく、教えて下さい。直立不動の姿勢でもつてそうお願いしてしまつたので、商人、いいえ人違いですと鼻のさきで軽く掌を振る機会を失い、よし、ここは一番、そのくぼたとやらの先生に化けてやろうと、悪事の腹を据すえたようである。

——ははは。ま。掛けたまえ。

——はっ。

——のみなながら。

——はっ。

——ひとつ。

——はっ。という工合いに、兵士の如く肩をいからせ、すすめられた椅子に腰をおろして、このようなところで先生にお逢いするとは実もって意外である。先生は毎晩ここにおいでになるのでしょうか。私は、先夜、先生の千人風呂という作品をはいしやう拜誦させていただきましたが、やはり興奮いたしましたして、失礼ながらお手紙さしあげた筈ではずございますが。

——あれは君、はずかしいものだよ。

——しつれいいたしました。私の記憶ちがいでございました。千人風呂はかさい葛西善蔵氏の作品でございました。

——まったくもって。

わけのわからぬ問答に問答をかさねて、そのうちに、久保田氏は、精神とかジャンルとか現象とかのこむずかしい言葉を言い出し、若い作家の読書力減退についてのお説教がはじまり、これは、まさしく久保田万太郎なのかもしれないなどと思ったら酔いも一時にさ

めはて、どうにも、つまらなくなつて来て、蹠そうろう跟と立ちあがり、先生、それではごめん下さい。これから旅に出るのです。ええ、このお金がなくなつてしまふところまで、と言いつつ内ポケットから二三枚の十円紙幣をのぞかせて、見せてやつて、外へ出た。

あああ。今夜はじつに愉快であつた。大川へはいろいろか。線路へ飛び込もうか。薬品を用いようか。新内と商人と、ふたりの生活人に自信を与えた善根によつても、地獄に墮ちるうれいはない。しずかな往生ができそうである。けれども、わが身が円タク拾つて荻窪の自宅へ易々とかえられるような状態に在るうちは、心もにぶつて、なかなか死ねまい。とにかく東京から一歩でも、半歩でもなんでも外へ出る。何なにとぞ卒して、今夜のうちに、とりかえしのつかないところまで行つてしまつて置かなければ。よこはまほんもく二円はどうだ。いやならやめろ。二円おんの字、承知のすけ。ぶんぶん言つて疾進してゆく、自動車の奥隅で、あつ、あつと声を放つて泣いていた。今は亡き、畏友、笠井一もへつたくれもなし。ことごとく、私、太宰治ひとりの身のうえである。いまにいたつて、よけいの道具だてはせぬことだ。私は、あした死ぬるのである。はじめに意図して置いたところだけは、それでも、言つて知らせてあげよう。私は、日本の或る老大家の文体をそっくりそのまま借りて来て、私、太宰治を語らせてやろうと企てた。自己喪失症とやらの私には、他人の

口を借りなければ、われに就いて、一言一句も語れなかった。たち抛らば大樹の陰、たとえば鷗外、森林太郎、かれの年少の友、笠井一なる夭折ようせつの作家の人となり語り、そうして、その縊死のあとさきに就いて書きしるす。その老大家の手記こそは、この「狂言の神」という一篇の小説に仕上るしくみになっていたのに、ああ、もはやどうでもよくなつた。文章に一種異様の調子が出て来て、私はこのまま順風を一ぱい帆にはらんで疾駆する。これぞ、まことのロマン調。すすまむ哉かな。あす知れぬいのち。自動車は、本牧の、とあるホテルのまえにとまった。ナポレオンに似たひとだな、と思つていたら、やがてその女のひとの寢室に案内され枕もとを見ると、ナポレオンの写真がちやんと飾られていた。誰もそう思うのだなど、やつとうれしく、あたたかくなつて来た。

その夜、ナポレオンは、私の知らない遊びかたを教えて呉れた。

あくる朝は、雨であつた。窓をひらけば、ホテルの裏庭。みどりの草が一杯に生えて、牧場に似ていた。草はらのむこうには、赤濁りに濁つた海が、低い曇天に押しつぶされ、白い波がしらも無しに、ゆらりゆらり、重いからだをゆすぶつていて、窓のした、草はらのうえに捨てられてある少し破れた白足袋は、雨に打たれ、女の青い縞しまのはんてんを羽織つて立つている私は、錐きりで腋わきの下を刺され擦くすぐられ刺されるほどに、たまらない思いであ

った。ハ克蘭カイをごろんなさればよろしいに、と南国訛りのナポレオン君が、ゆうべにかわらぬ閑雅かんがの口調でそうすすめて、にぎやかな万国旗が、さっと脳裡のうりに浮んだが、ほか、大阪へ行く、京都へも行く、奈良へも行く、新緑の吉野へも行く、神戸へ行く、ナイヤガラ、と言いかけて、はははと豪傑笑いの真似をして見せた。しっけい。さようなら、あら、雨。はい、お傘。私は好かれていますようであった。その傘を、五円で買います。みんながどつと声をたてて笑い崩れた。ああ、ここで遊んでいたい。遊んでいたい。額ぬかがくるめく。涙が煮える。けれども私は、辛抱した。お金がないのである。けさ、トイレットにて、真剣にしらべてみたら、十円紙幣が二枚に五円紙幣が一枚、それから小銭が二、三円。一夜で六、七十円も使ったことになるが、どこでどう使ったのか、かいても見当つかず、これだけの命なのだ。まずしい気持ちで死にたくはなかった。二、三十円を無雑作にズボンのポケットへねじ込んであるが儘ままにして置いて死ぬのだ。儉約しなければいけない、と生れてはじめてそう思った。花の絵日傘をさして停車場へいそいだのである。停車場の待合室に傘を捨て、駅の案内所で、江の島へ行くには？ と聞いたのであるが、聞いてしまつてから、ああ、やつぱり、死ぬるところは江の島ときめていたのだな、と素直うなずに首肯うなずき、少し静かな心地になつて、駅員の教えて呉れたとおりの汽車に乗った。

ながれ去る山山。街道。木橋。いちいち見おぼえがあつたのだ。それでは七年まえのあのときにも、やはりこの汽車に乗つたのだな、七年まえには、若き兵士であつたそうなの。ああ。恥かしくて死にそうだ。或る月のない夜に、私ひとりが逃げたのである。とり残された五人の仲間、すべて命を失つた。私は大地主の子である。地主に例外は無い。等しく君の仇敵である。裏切者としての厳酷なる刑罰を待つていた。撃ちころされる日を待つていたのである。けれども私はあわて者。ころされる日を待ち切れず、われからすすんで命を断とうと企てた。衰亡のクラスにふさわしき破廉恥、頹廢の法をえらんだ。ひとりでも多くのものに審判させ嘲笑させ悪罵させたい心からであつた。有夫の婦人と情死を凶つたのである。私、二十二歳。女、十九歳。師走、酷寒の夜半、女はコオトを着たまま、私もマントを脱がずに、入水した。女は、死んだ。告白する。私は世の中でこの人間だけを、この小柄の女性だけを尊敬している。私は、牢へ入れられた。自殺幫助罪という不思議の罪名であつた。そのときの、入水の場所が、江の島であつた。(さきに述べた誘因のためにのみ情死を凶つたのではなしに、そのほかのくさぐさの事情がいろいろあったことをお知らせしたくて、私は、以下、その夜の追憶を三枚にまとめて書きしるしたのであるが、しのびがたき困難に逢着し、いまはそっくり削除した。読者、不要の穿鑿)

をせず、またの日の物語に期待して居られるがよい）私は、煮えくりかえる追憶からさめて、江の島へ下車した。

風の強い日^{つよ}で、百人ほどの兵士が江の島へ通ずる橋のたもとに、むらがつて坐り、ひとしく弁当をたべていた。こんなにたくさんの人^{ひと}のまえで海へ身を躍らせたならば、ただいたずらに泳ぎ自慢の二三の兵士に名をあげさせるくらいの結果を得るだけのことであろう。私は、荒れている灰色の海をちらと見ただけで、あきらめた。橋のたもとの望富閣という葦簾^{よしず}を張りめぐらせる食堂にはいり、ビールを一本そう言った。ちろちろと舌でなめるが如く、はりあいのない呑みかたをしながら、乱風の奥、黄塵^{けむ}に烟る江の島を、まさにうらめしげに、眺めていたようである。背を丸くし、頬杖ついて、三十分くらい、じつとしていた。このまま坐って死んでゆきたいと、つくづく思った。新聞の一つ一つの活字が、あんなに穢^{よご}れて汚く思われたことがなかった。鼠いろのスプリング。細長い帝国大学生。背中を丸くして、ぼんやり頬杖をつく習癖がある。自殺しよう^しと家出をした。そのような記事がいま眼のまえにあらわれ出ても、私は眉ひとつうごかすまい。むごいことには、私、おどろく力を失ってしまっていた。私に就いての記事はなかったけれども、東郷さんのお孫むすめが、わたくしひとり^{ひと}で働いて生活したいと言うて行方しれずになった事実が、下

品にゆがめられて報告されていた。兵士たちが望富閣の食堂へぞろぞろとはいって来て、あまり勢いよくはいって来たので私のテエブルをころがした。コップもビールの壺びんも、こわれなかつたけれど、たしかに未だ半分以上も壺に残っていたビールが白い泡を立てつつこぼれてしまった。二、三の女中は、そのものの音を聞き、その光景を背のびして見ていながら、当りまえの様な顔をして、なんにもものを言わなかった。トオキイの音が、ふっと消えて、サイレントに変った瞬間みたいに、しんとなって、天鷲ビロード絨のうえを猫が歩いていのような不思議な心地にさせられた。狂氣の前兆のようにも思われ、気持ちが悪くなくなったので、それでも、わざとゆっくりと立ちあがり、お勘定してもらって外へ出た。たちまち烈風。スプリングの裾すそがぼつとめくりあげられ、一握の小砂利が頬めがけて叩きつけられぱちぱち爆はぜた。ぐつと眼をつぶって、今夜死ぬるとわれに囁ささやき、みんながみんな遠くへ去っていった、世界に私がひとりだけ居るような気持ちで、ながいこと道路のまんなかに立ちつくした。眼をあいたときには、まったく意志を失い、幽霊のように歩いて、磯いそへ出た。真くろい雲が充満し、空は暗くて低かった。見渡すかぎり、人の影がなかった。腐りかけた漁船がひとつ、砂浜に投げ捨てられ、ひっくりかえって、まっくろい腹を見せであるほかには、犬ころ一匹いなかった。私は、ズボンのポケットに両手をつっこみ、同

じ地点をいつまでもうろうろ歩きまわり、眼のまえの海の形容詞を油汗ながして捜査していた。ああ、作家をよしたい。もがきあがいて捜しあてた言葉は、「江の島の海は、殺風景であった」私はぐるつと海へ背をむけた。この海は浅く、飛びこんだところで、膝小僧をぬらすくらいのものであろう。私は、しくじりたくなかった。よしんばしくじっても、そのあと、そ知らぬふりのできるような賢明の方法を^{えら}拵れば。未遂で人に見とがめられ、^{なわめ}縄目の恥辱を受けたくなかった。それからどれほど歩いたのか。百種にあまる色さまさまの計画が両国の花火のようにぱつとひらいては消え、ひらいては消え、これときまらぬままに、ふらふら鎌倉行の電車に乗った。今夜、死ぬのだ。それまでの数時間を、私は幸福に使いたかった。ごつとん、ごつとん、のろすぎる電車にゆられながら、暗鬱でもない、荒涼でもない、孤独の極でもない、^{ちえ}智慧の果でもない、狂乱でもない、阿呆感でもない、^{ごうきゆう}号泣でもない、悶悶でもない、厳肅でもない、恐怖でもない、刑罰でもない、^{ふんぬ}憤怒でもない、諦観でもない、秋涼でもない、平和でもない、後悔でもない、沈思でもない、打算でもない、愛でもない、救いでもない、言葉でもってそんなに派手に誇示できる感情の看板は、ひとつも持ち合せていなかった。私は、深刻でなかった。電車の隅で一賤民のごとく寒さにふるえて眼玉をきよろきよろうごかしていただけのことであつたのであ

る。途中、青松園という療養院のまえをとおった。七年まえの師走、月のあかい一夜、女は死に、私は、この病院に収容された。ひとつきほど、ここで遊んで、からだの恢復をはかったのであるが、そのひとつき間の生活は、ほのかにはあつたけれども、私に生きているよろこびを知らせて呉れた。それからの七年間、私にとっては五十年、いや十種類の生涯のようにも思われたほど、さまざまの困難が起り、そのときそのときの私の辛抱もまったくむだのようであつて、私にはあたりまえの生活ができず、ふたたび死ぬる目的を以て、こんどはひとりでやつて来た。療養院にも七年の風雨が見舞つていて、純白のペンキの塗られていた離宮のような鉄の門は鼠いろに変色し、七年間、私の眼にいよいよ鮮明にしみついていた屋根の瓦かわらの燃えるような青さも、まだらに白く禿はげて、ところどころを黒い日本瓦で修繕され、きたならしく、よそよそしく、まったく他人の顔であつた。七年間、ほかの人から見たならば、私の微笑は、私の姿態は、この建築物よりいっそう汚れて見えるだろう。おや？ 不思議のこともあるものだ。あの岩がなくなっているのである。ねえ、この岩が、お母さんのような気がしない？ あたたくて、やわらかくて、この岩、好きだな、女のひとはそう言つて撫なでまわして、私も同感であつたあのひらたい岩がなくなつた。飛びこむ直前までそのうで遊びたわむれていたあの岩がなくなつた。こんな筈はずはな

い。どちらかが夢だ。がったん、電車は、ひとつ大きくゆれて見知らぬ部落の林へはいった。微笑ほほえましきことには、私はその日、健康でさえあったのだ。かすかに空腹を感じたのである。どこでもいい、にぎやかなところへ下車させて下さい、と車掌さんにたのんで、ほどなく、それではここで御降りなさいと教えられ、あたふたと降りたところは長谷であった。雨が頬を濡らして呉れておお清浄になったと思えて、うれしかった。成熟した女学生がふたり、傘がなくて停車場から出られず困惑の様子で、それでもくつくつ笑いながら、一坪ほどの待合室の片隅できつちり品よく抱き合っていた。もし傘が一本、そのときの私にあったならば、私は死なずにすんだのかも知れない。溺おほれる者のわら一すじ。深く、けわしく、よろめいた。誓う。あなたのためには身を粉にして努める。生きてゆくから、叱らないで下さい。けれどもそれだけのことであった。語らざれば、うれしい無きに似たりとか。その二人の女のうち筐かご眉まゆをひそめて笑う小柄のひとに、千万の思いをこめて見つめる私の瞳の色が、了解できずに終ったようだ。ひらつと、できるだけ軽快に身をひるがえして雨の中へおどり出た。つばめのようにはいかなかった。あやうく滑ってころぶところであった。ふりかえりたいな。よせ！　すぐ真向いの飲食店へさっさとはいった。薄暗い食堂の壁には、すてきに大きい床屋鏡がはめこまれていて、私の顔は黒眼がち、人なつか

しげに、にこにこしていた。意外にも福福しい顔であったのだ。一刻も早く酔いしれたく思つて、牛鍋を食い散らしながら、ビールとお酒とをかわるがわるに呑みませた。君、茶化してしまえないものがあつたのである。呑んでも呑んでも酔えなかつた。信じ給え。鏡の中のわが顔に、この世ならず深く柔和の憂色がただよい、それゆえに高雅、車夫馬丁を常客とする悪臭ふんぷんの安食堂で、ひとり牛鍋の葱ねぎをつついてゐる男の顔は、笑つてはいけない、キリストそのままであつたという。ひるごろ私は、作家、深田久弥氏のもとをたずねた。かれの、はつきりすぐれたる或る一篇の小説に依り、私はかれと話し合いたく願つてゐた。相そうしゅう州鎌倉二階堂。住所も、忘れてはいなかつた。三度、ながい手紙をさしあげて、その都度、あかるい御返事いただいた。私はその作家を好きであるのと丁度おなじくらいに、その作家もまた私を好きなのだ、といつのままにか、ひとりできめてしまつてゐた。のこり少い時間である。仕合せのことに用いなければいけない。私は、一秒の猶ゆ予よもなしに、態度をきめた。そのときの私には、深田氏訪問以上の仕合せを考案しているいとまがなかつた。雨はあがり、雲は矢のように疾駆し、ところどころ雲の切れま、洗われて薄い水いろの蒼空あおぞらが顔を見せて、風は未だにかなり勁く、無法者、街々を走つてあゝるいていたが、私も負けずに風にさからつてどんだん大股であるいてやった。恥ずかしい

ほどの少年になってしまった。千里の馬には千里の糧。たわむれに^{つぶや}呷いて、たばこ屋に立ち寄り、キャメルという高価の外国煙草を二個も買い、不良少年のふりをして、こっそり吸つては、あわててもみ消す。腰のまがった小さい巡査が、両手をうしろに組んで街道のまんなかをぶらりぶらり、風に吹かれて歩いていった。私は二階堂への^{みちじゆん}路順をたずねた。私は^{けいがん}慧眼。この老巡査は、はたして忘れ得ぬ人たちの中のひとりであった。私の手を引かんばかり、はにかむような^{とつきつ}咄吃の口調で繰りかえし繰りかえし教えて呉れた。なに、二階堂はすぐそのさきに見えているのだ。老^{ろうはい}徳の一生活人へ、まこと^{けいけん}敬虔の心でお礼を申し述べ、教えられたとおりの路をあやまたずに三曲りして、四曲りした角に、なんなく深田久弥のつましき門札を見つけた。かねて思ひはかっていたよりも十倍くらいきちんとしたお宅だったので、これは、これは、とひとりごとを言いながら、内心うれしく、微笑とめてもとまらなかつた。石の段段をのぼり、字義どおりに門をたたいて、出て来た女中に大声で私の名前を知らせてやった。うれしや、主人は、ご在宅である。右手の甲で額の汗をそつと^{ぬぐ}拭うた。女中に案内されて客間にとおされ、わざと秀才の学生らしく下手にきちんと坐つて、芝生の敷きつめられたお庭を眺め、筆一本でも、これくらいの生活ができるのだ、とずいぶん気強く思つたものだ。こよい死ぬる者にとってはふさわしからぬ

安堵あんどの溜息なげ息がほつと出て、かるく狼狽ろうばいしていたとき、蓬髮花顔ほうはつかがんのこの家のあるじが写真のままの顔して出て来られて、はじめての挨拶をかわしたのであったが、私には、はじめての人のようにも思われず、おととしの春にふと私から遠ざかっていった友人の久保君も、三四年まえのたしか今頃の季節に、きのう深田久弥に逢つて来たと言ひ、日本人の作家には全く類がないくらいの、文学でないホオム・ライフを持つていて、あまり温順なので、こちらが腹の中で深田久弥の間拔野郎と呟いて笑つているようなひどくいけない錯覚がひらひらちらついて困惑するほど、それほどたまらなく善良の人がらなのだよ、と私に教へて呉れたことがあつたけれど、いま私も、こうして対坐して、ゆくりなく久保君の身のうたと、それから、「深田久弥の間拔野郎」を思い出し、悖はいれい礼れいの瘡狗せきく、千石船に乗つた心地で、ずいぶん油断をしてしまった。いまさら、なにも、論戦しなければならぬ必要もなし、すべての言葉がめんどうくさくて、ながいこと二人、庭を眺めてばかりいた。私は形而下けいじか的にも四肢を充分にのばして、そうして、今のこの私の豊沃ほうよくを、いつたい、誰に教へてあげようか、保田與重郎氏は涙さえ浮べて、なんどもなんども首肯うなずいて呉れるだろう。保田のそのうしろ姿を思えば、こんどは私が泣きたくなつて、

——だんだん小説がむずかしくなつて来て困ります。

——そう。……でも。

口ごもつて居られた。不服のようであった。ヴィルヘルム・マイスタアは、むずかしく考えて書いた小説ではなかった、と私はわれに優しく言い聞かせ、なるほど、なるほどと了解して、そうして、しずかな、あたたかな思いをした。私は、ふと象戯しょうぎをしたく思つて、どうでしょうと誘つたら、深田久弥も、にこにこ笑いだして、気がるく応じた。日本で一ばん気品が高くて、ゆとりある合戦をしようと思つた。はじめは私が勝つて、つぎには私が短気を起したものだから、負けた。私のほうが、すこし強いように思われた。深田久弥は、日本に於いては、全くはじめでの、「精神の女性」を創つた一等の作家である。この人と、それから井伏鱒二氏を、もつと大事にしなれば。

——一対一ということにして。

私は象戯の駒こまを箱へしまいなから、

——他日、勝負をつけましょう。

これが深田氏の、太宰についてのたった一つの残念な思い出話になるのだ。「一対一。そのうち勝負をつけましょう、と言ひ、私もそれをたのしみにしていたのに。」

ここを訪おとうみちみち私は、深田氏を散歩に誘い出して、一緒にお酒をたくさん呑もう悪

い望や、そのほかに二つ三つ、メフィストのささやきを準備して来た筈であつたのに、このような物静かな生活に接しては、われの暴い息づかいさえはばかられ、一ひらの桜の花びらを、掌に載せているようなこそばゆさで、充分に伸ばした筈の四肢さえいまは萎縮して来て、しだいしだいに息苦しく、そのうちにぼきんと音たててしよげてしまった。なんにも言えず飼ひ馴らされた牝豹めひょうのように、そのままそつと、辞し去つた。お庭の満開の桃の花が私を見送つていて、思わずふりかえつたが、私は花を見て居るのではなかつた。その満開の一枝に寒くぶらんとぶらさがつている縄きれを見つめていた。あの縄をポケツトに仕舞つて行こうか。門のそとの石段のうえに立つて、はるか地平線を凝視し、遠あかねの美しさが五臟六腑ごそうろくぽうにしみわたつて、あのときは、つくづくわびしく、せつなかつた。ひきかえして深田久弥にぶちまけ、二人で泣こうか。ばか。薄きたない。間一髪のところ、こらえた。この編上げの靴の紐ひもを二本つなぎ合わせる。短かすぎるようならば、ズボン下の紐が二尺。きめてしまつて、私は、大泥棒のように、どんどん歩いた。黄昏たそがれの巷ちまた、風を切つて歩いた。路傍のほの白き日蓮上人、辻説法跡の塚が、ひゅつと私の視野に飛び込み、時われに利あらずという思いもつかぬ荒い言葉が、口について出て、おや？ と軽くおどろき、季節に敗けたから死ぬるのか、まさか、そうではあるまいな？ と立ちどま

って、詰問した。否、との応えを得て、こんどはのろのろ歩きはじめた。死んでしまった
 ほうが安楽であるという確信を得たならば、ためらわずに、死ね！ なんのともないの
 に、わがいのちを断つて見せるよりほかには意志表示の仕方を知らぬ^{れいり} 伶俐なるがゆえに、
 慈愛ふかきがゆえに、一^{いつきく} 掬の清水ほど弱い、これら一むれの青年を、ふびんに思うよ。
 死ぬるがいいとすすめることは、断じて悪魔のささやきでないと、立証し得るうごかぬ哲
 理の一体系をさえ用意していた。そうして、その夜の私にとつて、^{いし} 縊死は、健康の処生術
 に酷似^{こくじ}していた。綿密の損得勘定の結果であつた。私は、^{たけ} 猛く生きとおさんがために、死
 ぬるのだ。いまさら問答は無用であろう。死ぬることへ、まっすぐに一すじ、明快、完璧
 の鑄型ができていて、私は、^と 鑄かされた鉛のように、鑄型へさつと流れ込めば、それでよ
 かつた。何故に縊死の形式を選出したのか。スタヴロギンの真似ではなかつた。いや、ひ
 よつとすると、そうかも知れない。自殺の虫の感染は、黒死病の三倍くらいに確実で、そ
 の波紋のひろがりは、王宮のスキヤンダルの^{ささや} 囁きよりも十倍くらい速かつた。繩に石鹼を
 塗りつけるほどに、細心に安楽の往生を図ることについては、私も至極賛成であつて、^{おひ} 甥
 の医学生の言に依^よつても、縊死は、この五年間の日本に於いて八十七パーセント大丈夫で
 あつて、しかもそのうえ、ほとんど無苦痛なそうではないか。いちどは薬品で失敗した。

いちどは入水じゆすいして失敗した。日本のスタヴロギン君には、縊死という手段を選出するのに、永いこと部屋をぐるぐる歩きまわつてあれこれと思い煩わづらう必要がなかったのである。宿屋へ泊つて、からだを洗い、宿の、ま新しい浴衣ゆかたを着て、きれいに死にたく思つたけれども、私のからだだが、その建築物に取りかえしのつかぬ大きい傷を与え、つましい一家族の、おそらくは五、六人のひとを悲惨の境遇に蹴落すのだということに思ひいたり、私は鎌倉駅まえの花やかな街道の入口まで来て、くると廻れ右して、たつたいま、とおつて来たばかりの小暗おんくらき路をのそのそ歩いた。駅の附近のバアのラジオは私を追いかけるようにして、いまは八時に五分まえである、台湾はいま夕立ち、日本ヨイトコの実況放送はこれでお仕舞いである、と教えた。おそくまでまごついて居れば、すぐにも不審を起されるくらいに、人どりの無い路であった。善は急げ、というユウモラスな言葉が胸に浮んで、それから、だしぬけに二、三の肉親の身の上がり思い出され、私は道のつづきのよう路傍の雑木林へはいつていった。ゆるい勾配こうばいの、小高い岡になつていて、風は、いまだにおさまらず、さつさつと雑木の枝を鳴らして、少なからず寒く思つた。夜の更ふけるとともに、私の怪しまれる可能性もいよいよ多くなつて来たわけである。人がこわくてこわくて、私は林のさらに奥深くへすすんでいった。いつてもいつても、からだばかりきまらず、

そのうちに、私のすぐ鼻のさき、一丈ほどの赤土の崖がのっそり立った。見あげると、その崖のうえには、やしろでもあるのか、私の背丈くらいの小さい鳥居が立っていて、常磐木が、こんもりと繁り、その奥ゆかしさが私をまねいて、私は、すすきや野いばらを掻きわけ、崖のうえにゆける路を捜したけれども、なかなか、それらしきものは見当らず、ついには、崖の赤土に爪を立て立て這い登り、月の輪の無い熊、月の輪の無い熊、と二度くりかえして呟いた。やつとのもので崖の上までたどりつき、脚下の様子を眺めたら、まばらに散在している鎌倉の街の家々の灯が、手に取るように見えたのだ。熊は、うろろう場所を捜した。薬品に依って頭脳を麻痺させているわけでもなし、また、お酒に勢いを借りているわけでもない。ズボンのポケットには二十円余のお金がある。私は一糸みだれぬ整うた意志でもって死ぬるのだ。見るがよい。私の知性は、死ぬる一秒まえまで曇らぬ。けれどもひそかに、かたちのことを気にしていたのだ。清潔な憂悶の影がほしかった。私の腕くらいの太さの枝にゆらり、一瞬、藤の花、やつぱりだめだと望を捨てた。憂悶どころか、阿呆づら。しかも噂と事ちがつて、あまりの痛苦に、私は、思わず、ああつ、と木霊するほど叫んでしまった。楽じゃないなあ、そう呟いてみて、その己れの声が好きで好きで、それから、ふつとたまらなくなつて涙を流した。死ぬる直前の心には様様の花の像が走馬

燈のようにくるくるまわって、にぎやかなものの由であるが、けれども私は、さっぱりだめであった。私は釣り上げられたいもりの様にむなしく手足を泳がせた。かたちの間抜けにしんから閉口して居ると、私の中のちやちな作家までが顔を出して、「人間のもつとも悲痛の表情は涙でもなければ白髪でもなし、まして、眉間の皺みけんしわではない。最も苦悩の大なる場合、人は、だまって微笑ほほえんでいるものである。」虫の息。三十分ごとに有るか無しかの一呼吸をしているように思われた。蚊かの泣き声。けれども痛苦はいよいよ劇はげしく、頭脳はかえって冴えわたり、氣の遠くなるような前兆はそよともなかった。こうして喉の軟骨のつぶれるときをそれこそ手をつかねて待つていなければいけないのだ。ああ、なんと、氣のきかない死にかたを選んだものか。ドストエーフスキイには縊死の苦しさがわからなかった。私は、はつきり眼を開いて、氣の遠くなるのをひたすら待った。しかも私は、そのときの己れの顔を知っていたのだ。はつきりと、この眼に見えるのであった。顔一めんが暗紫色、口の両すみから真白い泡あわを吹いている。この顔とそっくりそのままのふくれた河豚ふぐづらを、中学時代の柔道の試合で見たことがあるのだ。そんなに泡の出るほどふんばらずとも、と当時たいへん滑稽に感じていた、その柔道の選手を想起したとたんには、ひどくわが身に侮辱を覚え、怒りにわななき、やめ！ 私は腕をのぼして遮しやにむに二無二

枝につかまった。思わず、けだもののような咆^{ほう}哮^{こう}が腹の底から噴出した。一本の外国煙草がひと一人の命と立派に同じ価格でもって交換されたという物語。私の場合、まさにそれであった。繩を取去り、その場にうち伏したまま、左様、一時間くらい死人のようにぐったりしていた。蟻^{あり}の動くほどにも動けなかった。そのときポケットの中の高価の煙草を思い出し、やたらむしように嬉しくなつて、はじめられたように、むっくり起きた。ふるえる手先で煙草の封をきつて一本を口にくわえた。私のすぐうしろ、さらさらとたしかに人の気配がした。私はちつともこわがらず、しばらくは、ただ煙草にふけり、それからゆつくりうしろを振りかえつて見たのであるが、小さい鳥居が月光を浴びて象牙^{ぞうげ}のように白く浮んでいるだけで、ほかには、小鳥の影ひとつなかった。ああ、わかつた。いまのあのけはいは、おそらく、死神の逃げて行つた足音にちがいない。死神さまにはお気の毒であったが、それにしても、煙草というものは、おいしいものだなあ。大家にならずともよし、傑作を書かずともよし、好きな煙草を寝しなに一本、仕事のあとに一服。そのような恥かしくも甘い甘い小市民の生活が、何をかくそう、私にもむりなくできそうな気がして来て、俗的なるものの純粹度、という緑^{ろくしょう}青^{しょう}煙^{えん}の妖^{よう}雲^{うん}論^{ろん}者^{しゃ}にとつては頗^{すこぶ}るふさわしからぬ題目について思いめぐらし、眼は深田久弥のお宅の灯を、あれか、これか、とのんきに捜

し^{もと}需めていた。

ああ、思いもかけず、このお仕合せの結末。私はすかさず、筆を攔^おく。読者もまた、はればれと微笑んで、それでも一応は用心して、こつそり小声でつぶやくことには、

——なあんだ。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年8月30日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：しず

1999年7月22日公開

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狂言の神

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>